



## シリーズ〈宇宙総合学〉

教科書  
お薦め度  
4  
☆☆☆☆★

京都大学宇宙総合学研究ユニット 編

朝倉書店 A5判 全4巻・各2,300円＋税

宇宙に惹かれる理由は、人それぞれだ。天文月報の読者には、天文学者や、宇宙物理学を志す学生、天体観測を楽しんでいる方が多く、天文学の枠組みで見えてくる宇宙の姿に魅了されているはずだ。自分もそのひとりだと思ふ。しかし、宇宙を舞台にした学問領域は、その外側にも、豊かな世界として広がっている。

シリーズ〈宇宙総合学〉は、そんな世界への扉になっている。宇宙物理学だけではなく、宇宙工学、宇宙医学や生物学、宇宙倫理学や哲学まで、宇宙を舞台にした多様なアプローチが幅広く収められた4冊である。2008年に発足した、京都大学の理工系から医学生物系、人文社会系までを含む、宇宙に興味を持つ研究者が集まった「宇宙総合学研究ユニット」（通称：宇宙ユニット）の、全学1,2回生向けの講義「宇宙総合学」の講義録が元になったシリーズだ。いくつか章のタイトルだけ拾ってみると、「宇宙の覗き方（京都大学3.8 m望遠鏡）」「宇宙はどのように進化したか」「生命の起源と宇宙」「宇宙災害」「太陽活動の長期変動と地球気候（宇宙気候）」「宇宙機の軌道設計」「日本の有人宇宙活動」「人が宇宙へ行く意味」「宇宙医学・生理学—宇宙でのからだの反応」「宇宙倫理—宇宙への進出をめぐる倫理問題」「あとがき—生存圏～人類は宇宙へ～」などなど。宇宙というテーマでこれだけ多くの現役の研究者が集まり、読みやすくも、最先端をカバーできる話題を提供できるのは、20世紀に自由な学風を世界に示していた京都大学の総合大学としての底力なのだろう。

天文学を生業とする端くれとしては、意味のある研究を残すために専門性の深い井戸を掘り進め

たい。「専門バカでないものは唯のバカである」という言葉もあり、安易な分野融合には違和感も持っている。一方で、専門性の高いマニア集団になってしまえば、学問そのものが持っている多様性や、開かれた視点が阻害され、そもそも学問とはなんだっただけ、と振り返ることも必要になるだろう。このシリーズ〈宇宙総合学〉では、顔見知りな天文学の先生方の書き味を楽しむのももちろんだが、医学や生物学、人文社会科学などの、普段は触れない分野から眺めた宇宙の姿を楽しく読みすすめることもまた、天文月報の読者へのお勧めといえるだろう。

今後、宇宙における人類の活動が多様になっていけば、必要になる知識や視点も自ずと多様になるだろう。私たちは、地球近くの宇宙空間の利用だけでなく、月や火星も視野に入り、人類が宇宙に出て行って活動する時代に入ってきた。歴史的には、宇宙の大規模プロジェクトは、資金的、技術的な制約から国家が主導することがほとんどだったが、昨今は民間が宇宙活動を活性化している。宇宙を対象にした人類の活動は、けっして特定の機関の専売特許ではなく、ひろく人類すべての活動領域であり、さまざまな分野を持つ人々の関心に基づいて成り立っている。天文学や宇宙探査の専門性を持つ私たちも、ひろく人文社会科学や民間ビジネスの人が抱く宇宙への関心にも注意を払うことで、新しい形での科学研究の芽が育つかも说不定。そういう視点で、手元に置いておきたいシリーズ〈宇宙総合学〉である。

榎戸輝揚（理化学研究所）